

出会い ふれあい 助け合い

サロンあべの

VOL.190

へサロン・あべのの3月の出会い

うテーマでお話を伺いました。

・ある本を読んで

平成14年3月16日(土)、へサロン・あべのV3月の出会いは、サロン紙に連載中の「晴れのち

・読み書きは人生のエキス

私はプロではありませんが、

学校を出てからエッセイや童話を書くことを仕事にしています。書き始めてから、かなりの年数になりますが、一向に上達しません。自分の努力の足りないのが悔やまれてなりません。でも、私は書くことをやめると何も残らないので、これからもうつと書いていきたいと思つています。書くという事は、いろいろな本を読むことも大切ではないかと思つています。書くことはもちろんですが、読むこともおそくて一カ月に一冊くらいしか読めません。それでも回を重ねていくとかなりの本を読んでいることになります。私がこれまでに得た知識はほとんどが読書だといつても過言ではありません。

いつだったか、ある本を読んでいると、大学教授のAさんがこんなことを書いていました。
お医者さんであるB先生が、5年程前から身障者の施設を建てておられるのだが、私(A教授)はB先生に建てられた動機を伺ったら、先生は次のように答えられた。



ある本を読んで

晴れ」の執筆者である稲垣恵雄氏は、愛妻の登美子夫人を伴われ、ヘルパーさん方と共に電動車いすで東大阪市より来てくださり、「ある本を読んで」とい

ある日曜日の朝、B先生は用があつてバスに乗られた。早かつたためか乗客は少なかった。しばらくしてバス停に止まると、幼稚園くらいの男の子が母親と一緒に乗ってきた。そして二人は前の方の席に座つたが一分もたたないうちに男の子は立ち上がつて車内を走り始めた。そうこうするうちにバスは次の停留所まで、今度はその男の子と同年ぐらいの足の不自由な子が母親に抱きかかえられるようにし

で乗ってきた。そして一番前の席にすわった。元気な男の子は相変わらず車内を走り回っていた。母親は何も言わずにだまつていたが、他の乗客の視線が気になったのか

「これっ、じっとしていなさい」と二〜三回叱った。でもそれぐらいのことで男の子は言うことを聞くはずがない。母親は見るにみかねて

「言うことをきかないと見てみ。あの子のようになるで」と足の不自由な子を指さした。その一言がこたえたのか男の子は席にもどって降りるまでおとなしくしていた。当然ながら足の不自由な子にもその母親にも聞こえている。B先生は中程にすわっていたが、母親のうしろ姿から悔しさがにじみ出ているのがよく分かったという。そして先生は「言うことをきかないと見てみ。あの子のようになる

で」と足の不自由な子を指さした母親の何といやらしくてみにくい心なんだろう、と非難していた。しかしよく考えてみると、いやらしくてみにくい心は他人事ではなく、この自分の心の中



本を読むことも仕事・・・と、稲垣恵雄さん

にあるということに気づかれた。そのいやらしくてみにくい心を何とか乗り越えたい。それにはどうすればいいのか、いろいろと悩み苦しみました。その結果、幸いにして資金もあるし、立地

条件の整った場所もあったので身障者の施設を建てることに決意したという。

A教授はこのB先生のすばらしい行為に心うたれ、一人でも多くの人に知ってもらいたくて本に載せられたということでした。

こうした施設を建てておられる人は沢山おられますが、たいがいの方は「私は立派な施設を建てている」とか「障害者のために建ててやっている」と自慢げに話します。でもB先生のように「自分のいやらしくてみにくい心乗り越えるため」に施設を建てたのは珍しいと思います。私も心ゆさぶられるほど感動しました。そして先生のいわれるように「いやらしくてみにくい心」は他人事ではなく、この自分の心にもあるということをお教えられました。

・これからも読書

年とともに目がだんだん疎くなり、本も読みづらくなってきました。でも私にとっては読むことも仕事ですので、これからもどんどん良書を読んでいきたいと思っています。

ご自身が大好きな詩、相田みつをの「こんな顔で」を力強く語って、話のしめくりにされた。

こんな顔で

相田みつを 作

宮沢賢治の詩にある

「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」というのは

こんなひとを言うのだろうか。

この顔は

悲しみに耐えた顔である

苦しみに耐えた顔である

人の世のさまざまな批判に

じっと耐えた顔である

そして

一言も弁解しない顔である
 何にも言い訳しない顔である
 そしてまた
 どんなに苦しくても
 どんなに辛くても
 決して弱音をはかない顔である
 絶対にグチを言わない顔である
 その代わり
 やらねばならぬことは
 ただ黙ってやっていくという
 固い意志の顔である
 一番大事なものに
 一番大事なのちをかけていく
 そういうキゼンたる顔である
 この眼の深さを見るがいい
 深い眼の底にある
 更に深い憂いを見るがいい
 弁解や言い訳ばかりしている
 人間にはこの深い憂いはいできない

「あべのエコ縁日」に参加

阿倍野区の花は桃、その花が咲き誇る桃ヶ池公園。今年には桃に桜が咲き競い、急ぎ足に訪れた春爛漫の公園。その入口横にある阿倍野青年センターで3月17日(日)、「あべのエコ縁日」が開催され、地域の子どもたちを楽しんでもらえる企画が所狭しと繰り広げられました。室内では、手作りおもちゃや伝承遊びのコーナー、絵本の読み聞かせや人形芝居。また野外では公園探索隊やパン焼き実習などがあり、そのどれもが見ているだけでも面白く、また参加しやすいものでした。それらのコーナーがいっぱいある中、ゴミやリサイクル問題など「エコ縁日」の名にふさわしいコーナーも展示されており、時間ごとに紙芝居やスライドで、ゴミの問題・リサイクル商品化の大切さなどの語りかけがありました。子どもも大人も立ち止まり引きつけられる身近なテーマでした。

その一隅に〈サロン・あべの〉は昨年に続き2度目のサロングッズコーナーを設けていただきました。サロン紙にも広告している品々の中「阿倍野名所旧跡いろはがるた」は若いお母さんや最近阿倍野へ越してこられた方などに喜ばれました。

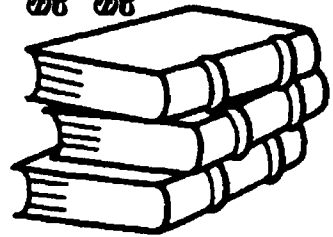
日ごろ子どもたちと接する機会の少ない私ですが、この日ばかりは子どもたちのキラキラ輝く瞳と歓声に笑顔こぼれる1日となりました。(け)

息子よ
 こんな顔で生きてほしい
 娘よ
 こんな顔の若者と巡り合って
 ほしい
 休憩の後、参加者に感想や質問などを聞きました。

「好きな本は？」
 「五木寛之の本」
 「好きな言葉は？」
 「墨の玄(すみのくろ)……真つ黒になる前の明るさ」自分流の解釈は、「どんな場合でもゆとりをもつて一歩下がる」ことだと思っている。

また、自筆で書かれた原稿を見せていただくと、味わい深い優しい字。これをサロン紙で活字にするのがもったいないという声も聞かれた。サロン・あべのV3月の出会いでした。
 参加者21名(山村貴司)

つん読 ぶん読 みてるだけ



笑う本

【算数 国語 理科 殺人】、「会社を休みましょう」殺人事件」など、ユニークなタイトルに、ついつい手が伸びる。著者は、吉村達也さんである。面白い・・・というか、楽しい。読み始めると、一気に全部読んでしまう。私はこのまえ、寝る前に読み始めてしまい、結

局寝たのが夜中の二時頃であつた・・・もし、これをきつかけに、「読んでみようかな」とお思いになつた方、寝る前に読むのはあまりおすすめできません。それから、電車の中なども。これは、「一気に読んでしまうから」ということだけではなく、「笑つてしまうから」という理由もあります。そう、笑つてしまうのです。ですから、吉村さんの本を読むときは、一冊読む時間と、一人の空間が必要です。(私はそう思います)

【「会社を休みましょう」殺人事件】については、所々に敬語が使われているのが面白かつた。なんだか、「ももたろう」などの昔話を読んでいるような。真剣に読んでいるところに、つつこみが入るという感じで笑つてしまう。

次に、エッセイスト、群よう

こさん。この方のも、吉村さんの本と同様、一人で読みましょう。笑います。私は特に、「トラちゃん」が好きである。群さんが昔お飼ひになつてた猫の話で、・・・といつても、他にもいろいろ動物が出て



くるのだが。面白い。短編集なので寝る前に読んで良いでしょう。しかし逆に、飽きないのでどんどん読んでしまう、そういうタイプの方は、気を付けてください。

最後に、吉村達也さん、群よ

うこさん、この二人に共通して言えることは、「文章の運び方、言い回しが大変面白い」ということである。本当に、笑います。(柴本実華)

古本屋のおばちゃん

駅裏に小さな古本屋がある。何がきつかけで、行くようになったか定かでないが、行き初めてすぐのところ、本を売りに行ったことがある。この手の本はうちでは売れへんさかい、よそへ持って行って。と、買ってもらえなかつた憶えがある。

こんなことがあつてからも、暇があれば、ひやかし半分にはよくちよく寄つていた。

そのあと大阪を離れて、久

しく顔を見せなかったが、何年ぶりかで前を通りかかって、中から声を掛けられた。店も変わっていない、店番するおばちゃんの居住まいも前といつしよなのに、なにかほっとするものがあり、また月後の雑誌などを見に寄るようになった。

奥さんお元気ですか。坊ちゃんどないしてはる・・・お勤め決まりましたか。結婚は。会話の中身もずいぶん変わってきて、最初からすれば、かれこれ五十年近くにもなるうかと思う。が、このおばちゃんはまったく変わらない。

ついこの間も店先で立ち話をしているとき、高校生くらいの男の子が二人やってきて、ポルノ雑誌を見出したとたん、あんたら、買わへんねんやろ。帰リイ。おばちゃんは一喝した。

おばちゃんはとつくに九十を過ぎているが、まだまだ、間に「あ」の字を入れては呼べない、おばちゃんである。(二石)

私と読書

少年少女世界文学全集という五十巻くらいのが家にあって、小学生の頃、熱心に読んで、クオレ、ふしぎの国のアリス、ギリシャ神話・・・ルナール、ケストナー・・・挿し絵もセンスの良いもので、好きな物語は何度も繰り返し読んで読んで読んだという記憶がある。お陰で他の教科はともかく、国語の点数だけは頭を悩ませずに済んだ。

中・高生時代は文学少女(今は死語?)を気取る友人達と放課後、図書室や書庫に溜ま

り、女学生好みの小説に夢中になったものだ。嵐が丘、ジーン・エア・・・ヘッセ、サガン・・・今、想い出してもロマンチックな気分になる。

主婦の現在は、ひとりの日など早めに家事を済ませ、ゆつたりとソファに腰かけて、お茶を用意し、好きな読書に耽るのは至福の時間である。ページを繰って終わりが来るのが惜しく感じられる本に巡り会う幸せはなにもものにも代え難い。最近読んだ「アルジャーノンに花束を」もそのような一冊だった。

三十二歳で、幼児の知能しか持たない青年が実験的な手術を受け超知能を手に入れる。手術を受けてからの過程が彼の報告書から伺われるのだが、稚拙な文章が、知能が上がるにつれて通常の人間以上の難解な表現を混じえるようになる。

る。その頃には以前の自分には見えなかった周りの人々の彼への関わり合いや気持ちが見えてくる。馬鹿にされ、からかわれ、虐待を受けていた事実が。そして、また実験的手術の失敗により、もとの知能に戻っていく。一度得た能力の低下、憶えていたものを忘れ、自らが過去に書いたリポートさえ理解できなくなっていくのを意識する恐ろしさ。

全ての障害を持つ人たちが、私を含めて中年、初老に差しかかって能力の衰えを感じだした人たち、それ以外の誰もが主人公のいずれかの過程に自分自身を当てはめて感じずにはいられない本である。

早川書房「ダニエル・キイス文庫」みなさまもぜひ読んでみてください。自分の人生がきつとページの間から見えてきます。(表谷恵美子)

障害者の雇用と 就労を考える

11

障害者の雇用・就労と教育

茅原 聖治

これまで述べてきたような時代的背景および現状の下、障害者の雇用と就労は進展しているが、その中からキーワードを抽出すると、「障害者の持つ障害の多様化・重度化」、「産業構造のサービス化と情報化」、「IT機器とネットワークの発達」などが挙げられるだろう。これら3つの要素が複合的に関連し合って、障害者の雇用と就労を転換しつつある。ここで必要とされる諸能力というのは、身体的な能力・機能ではなく、むしろ知的な能力を含む精神的な能力である。既存のものを応用、発展していく能力だけではなく、新しい何かを創造する能力

である。そして、それに必要なのは経済学で言う「人的資本」(human capital)の形成なのである。人的資本とは、教育や訓練などによって人々が体得する知識や技能のことである。この人的資本を多く形成し蓄積した者はより高い生産性を有する者として就職する際に有利になったり、より高い賃金が得られたりするのである。そして、ひいては国の経済成長の源泉となる。

障害者、特に身体障害者は身体的な機能には障害があっても知的な能力には問題のない者が少なくない。また、知的障害、精神障害を持ついても特定の能力がずば抜けて優れている例もある。簡単に言えば、これまで身体的な障害が理由で労働力となり得なかった人々でも、現状では人的資本の形成・蓄積によって労働力となる可能性が高まってきている。さらには、健常者と異なったライフスタイルを持つ障害者の感性や知識が新しい何かを創造する契機となるかもしれない。このように、障害者が人的資本を形成・蓄積することは自らの生きがいを作り出すと同時に、障害者の人的資本が社会のニーズとなる時代が間もなく

到来するように思われる。そして、人的資本形成で最も大事なのは「教育」である。

しかし、障害者が人的資本を形成するバリアがまだ日本には存在する。すなわち、障害者には教育の機会が全面的に認められていないのである。特に普通校と障害児学校(盲・ろう・養護学校)が分離されている点である。近年、先進各国ではこのような分離教育を順次廃止する方向が打ち出されているが、日本では教育改革の名の下にむしろ強化されているように見える。分離教育は、障害者が健常者レベルの教育水準の人的資本形成を阻害し、また、健常者との交流の中から社会性を得る機会を逃す。さらに健常者の側にも、障害者とともに勉強し活動することから得られる障害者に関する経験的共通人的資本を形成するチャンスを失わせている。ノーマライゼーションを推進している社会福祉環境と分離教育を貫いている教育環境は明らかに政策の不整合を生じていると言わざるを得ない。したがって、教育環境もまた、早期の統合教育(インクルージョン)を推進し、障害者学校は選択制のオプションとすべきであろう。

★新しい時代

これからどんな時代になるか、想像することは難しいものだ。私は、いま幕末の政治について書かれた本を読んでいるが、それによると明治維新のわずかに二、三十年前に江戸幕府によって行われた「天保の改革」は封建時代の延長を図るもので、とても新しい時代を予想してつくられたものではなかった。明治維新が目前に迫っていた時期にあつても、多くの人々は古い時代の考え方から抜け出すことはできていなかった。

私が、このような歴史を振り返って驚きを感じるのには次の二点である。まず、後世の人々から見れば時代は明らかに変わっているのに当時の大多数の人々はそれに気づいていなかったことである。そして大多数の人々は時代の変化を予想していなかったにもかかわらず、時代は変わってしまったということである。時代は人間が作っているにもかかわらず、大多数の人の予想を超えた方向に全ての人を強引に引っ張っていくのである。

時代が変わるといふと私たち個人の生活にはかかわりが薄いような印象がある



が、実際はそうではない。まず誰もが実感するのが経済的な不況や雇用状況の激変だろう。私の勤務先でも給与の引き下げがあり、人員の削減、早期退職の奨励など、これまで考えられなかったような

ことが行われている。問題は、流れの読めない時代の変化のなかでどう生きていけばいいのかということだろう。いまの私にとつては差し迫った問題でもあるので、自分はどう生きていくつもりなのか、次のように整理してみたいと思った。

第一に、多くの人が言っていることだが、大きな変化を大きな機会として積極的にとらえることである。いまの状態がいくら良くても時代の変化を前にしては、その状態は維持できない。維持しようと思っても過去の最良の状態よりも悪くなることは避けられない。とすれば、その変化を逆に利用して、新しい状態を作り上げていこうと思う。

第二に、実質が伴わない外面的で形式的なことは安定した時代にこそ力をもつものである。言い換えれば、変化する時代においては肩書きや経歴、資格、学歴といったものは意味をもたなくなるだろうということだ。個々人の実力が問われる時代になると言えば聞こえが良いかもしれないが、逆に言えば、不断の努力が

求められるようになったということだ。形だけのものに参加していれば、どうにか体面が保たれるということが以前の社会にはあった。永年勤続が評価されていたのである。しかし、これからは、そうはいかない。毎年、同じ仕事しかしなければ、加齢とともに処理できる仕事の量は減ってくるはずである。にもかかわらず年齢とともに給与が上がるとすれば、そのような人は解雇の対象となってしまうのである。

失業率が記録的に上昇し、地域社会は崩壊し、犯罪が増え、まるで暗い話題ばかりだが、これも時代が大きく変化しつつある証拠なのだろう。新しい時代に完全に入ってしまったなら、人々の生活は再び安定すると思う。ただし、それは五十年先になるのか、百年先になるのかわからない。

しかし戦争に巻き込まれず、民主的な政治体制が維持される限り、時代がどのようなに変わろうとも希望はあるはずだ。二十年、三十年単位で考えれば状態は悪化しているように見えるが、二百年、三百年単位で考えれば、社会は良くなっていることが多いと思う。それを信じて、ともに手を携え、困難な時代を乗り越えていきたいと思う。

(知)

春の日

四月といえば、桜をはじめ、すみれ、たんぽぽ、チューリップなどたくさんの花が咲き、また小動物や小鳥たちも活動します。正に春本番です。窓からさし込んでくる陽ざしも立春の頃から徐々に変化を見せ、四月になると暖かさと明るさが増してきます。このように暖かくて明るくなつた太陽やのどかでうらかな日のことを「春の日」といいます。

「春の日」と聞いただけでなんだかばかばかとした温もりがあり、夢と希望にあふれたものを感じるのは私だけではないと思います。それに身体の不自由な者にとつては、やはり暖かい方が動きやすいので、

晴れのち晴れ

④3

稲垣 恵雄

私はこのシーズンが大好きです。

「春の日」によく似たことばに「春日ハルヒ、春日ヒメツクシ、春日影カスガカゲ、春の夕日、春の入日」などがありますが、更に「光の春」とも言います。「光の春」というのも陽ざしが冬のシーズンに比べてよりいつそう暖かくて明るくなるからです。春の小鳥たち、わけてもひばりは温度の暖かさよりも光の明るさや強さで春の到来を感じるそうです。春は秋とともに行楽のシーズンでもあります。これからだんだん暖かくて過ごしやすくなりますので、各地の行楽地へ出かける人もたくさんおられることでしょう。私も晴天の日にはどこかへ出かけ、一日のんびりと「春の日」を楽しみたいと思っています。

植物あれこれ

第三十九回

山口康二郎

山火事が砂漠化を防ぐ？

記録的な高温のためか、日本でも山火事が頻発していますが、その原因は、焚火など人為的なものです。

日本では、山火事が起きたら大変だという意識があります。それ故、山火事というと森林と環境が破壊される悲劇として報じられるのが常です。しかし、乾燥気候の地域では山火事が起きないと砂漠化が進行してしまうことがあるといわれています。

以前一八五号で、帝塚山学院大学のジェフ・パークランドさんのことを書きましたが、彼は、二十歳まで傘を持ったことがないくらいの乾燥地帯のアメリカ南部地帯の生まれで、こういう地帯では自然発火の山火事が重要な意味をもっているのです。



からも自分を守るために他の植物の成長を阻害する物質を放散して自分の生き残りを図っているのです。その作用を「アレロパシー」と名づけられたのです。

日本でも昔から「なすびの木の下には特定の草しか生えない」と言い伝えがあります。日本は雨が多いため、根から放散されたアレロパシーを引き出す化学物質が流されたり、分散され、植物の多様性が守られているのですが、アメリカのカリフォルニア州は極度の乾燥気候下にあるため、アサギリソウやヨモギの仲間など背丈の低い植物が生え、それらから、地中に放散されたアレロパシー作用のある化学物質が、雨がほとんど降らないため蓄積され、他の植物が生育出来ない環境が生まれてしまいます。そこに山火事が発生すると、火が地中に放散された化学物質を破壊し、他の植物が生長出来る状態になり草原が戻るのです。

平均すると二十年くらいのサイクルで自然発火による山火事が砂漠化を防いでいるのです。その秘密は「アレロパシー作用」といわれています。みなさんよくご存じのフイトンチッドは植物の葉っぱから発せられるものですが、植物は、根

このように山火事が植物社会の輪廻と、そこで暮らす植物生活のプログラムそのものに、組み込まれているともいえるような現象に、自然の不思議さを改めて実感しています。

美智子のこんな話

岸田美智子

「二次障害ハンドブック」が
発行されました

ポカポカ陽気にさそわれて、花の多い賑やかな季節になり、車いすで出かけやすい頃となりました。春は生命力を感じることも多い季節ですが、反面、人の身体にとってはいろいろと体調が変わり、夏に向けて身体が動き出す時期だそうです。変調のこの時期、身体のうちこちに病気が出やすいし、精神的にも病気になるやすいのだそうです。私も最近二次障害で首が痛くなったりしました。皆さんも二次障害に悩んでい

「二次障害」理解して

大阪の
医師ら 調査結果や手記を本に



ハンドブックの編集に携わった障害者ら大阪府平野区で

体の不自由な人が抱える問題に「二次障害」と呼ばれるものがある。おだんの生活の中で、手足のまひの程度が悪化したり、別な部位で新たな障害を抱えたり……。働く障害者が増えることも表面化し、ハンディを克服しようと頑張ることも原因という見方もある。「二次障害」の深刻さについて理解してもらおうと、大阪府内の障害者や医師らが、自らが実施した実態調査や手記を本にまとめた。

「二次障害ハンドブック」。東大阪生協病院リハビリテーション科の大井正正医師(56)ら「肢体障害者二次障害検討会」

(青藤弘生代表)のメンバーが編集した。大井さんによると、脳性まひやポリオの後遺症などに悩む人が成人期になって新たに抱える障害を、もとの障害と区別するために名づけられた。首から背にかけて痛む頸椎症の事例が多々、肩や股関節の痛みなども出る。企業や共同作業所で働く人が増えて事例報告が目立つようになったという。

介護用品を扱う店舗で働く東大阪市の上野真治さん(47)も苦しい一人。介護してくれていた母親が腰痛になったため、自分で車イスに乗ろうと理学療法士と相談、天井からロープを下けてもらった。訓練し、腕の方で移動できるようになったが、やがて背中が痛くなったという。頸椎症と診断されて手術し、新たな痛みと不安を抱えた。(母 9) 八。

大井さんは、研究家上の分野だけに、言葉の定義、定かでない未知の部分も多い。だから「二次障害」や家族の体験談は貴重だ。生活環境や労働条件との因果関係も注目した」と話す。文芸春秋刊。1600円、本体1500円。問い合わせは、同検討会(06・6702・981)。

る方も多いと思いますが、この二次障害はまだまだ社会的にも医療的にも研究段階であり、よい解決策もまだ見つかっていないようです。

最近「二次障害ハンドブック」という本が発行されました。この本を読むと障害者の二次障害を予防するためには、医療面はもちろん、リハビリのあり方や住宅環境、労働条件、経済的な保障、障害者の健康に対する知識などなど、多面的な支援が必要

だということがよく分かります。紹介記事を掲載しておきますので、皆さんもぜひ読んでみてください。

【連絡先】

自立生活センター・まいど
担当 岸田

TEL 〇六〇六六〇九一三二二三三
FAX 〇六〇六六〇九一三二二〇

01

<サロン・あべの>毎月の出会い

平成13年度活動テーマ「地域とのふれあい」

月・日・曜日	会場	毎月の出会い	パネラー
平成13年 4月21日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	地域との関わり ～木彫り職人とボランティア活動～	西浦清輝氏 (サロン「アイ」代表)
5月19日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	ビデオ鑑賞 {老人Z} 大友克洋原作 SF アニメ映画	
6月16日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	素敵な出会い、 みかん(犬の名前)を聴導犬に	岸本宗也氏・淑子夫人・みかん 手話通訳 林さん・山本さん
7月21日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	アミューズメント・パーク比較 —USJ&DLT—	フリートーク
8月12日・日	市立工芸高校校庭	第28回あべのカーニバル 「さろん亭」開店	
9月15日・土	長居公園	花と緑と自然の情報センター見学	
10月20日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	「大阪バリバリマップ」で バリバリ遊ぼう!	石田義典氏・小坪琢平氏 (社会資源マップ作成委員会)
11月17日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	まちを変える路面電車・LRT	磯崎章一氏・浜村陽一氏 (大阪にLRTを走らせる会)
12月1日・土	なごみ処「えん」	ひるを楽しもう。	昼食会
平成14年 1月19日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	人生いろいろ、輝いて生きよう ～車いすから見えてきた 新しい価値観とさまざまな思い～	宮脇淳氏 (サロン・にし代表)
2月16日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	メイクと心 ～五感のチカラで明るく元気に～	筑後千晶氏・角谷安規子氏 (メイクアップアーティスト協会)
3月16日・土	育徳コミュニティー センター2階研修室	ある本を読んで	稲垣恵雄氏
3月17日・日	阿倍野青年センター	あべのエコ緑日・サロングッズ販売	

●その他の活動

□<サロン・あべの>紙 毎月第3土曜日発行

□<サロン・あべの>紙 毎月朗読テープ作成(朗読ボランティア・グループ「糸でんわ」)16名へ送付

□さろん文庫開設…毎週金曜日午後1-4時(阿倍野区在宅サービスセンター・ビューロー室)

□さろん文庫本、朗読テープ作成…朗読ボランティア・グループ「糸でんわ」

□広報活動…アベノ・タウン紙、ボランティア情報誌「コンボ」、他区サロン紙

□海外文通…アメリカ・Patti Trucky、イギリス・Margaret Bowler、韓国・馬泰植、

ドイツ・Brigitte Ehrenberg

□サロングッズ制作と販売…<サロン・あべの>10周年記念誌「はあとが、はろー!」、一筆箋、

絵はがき「花だより」「新・わがまち阿倍野」、阿倍野いろはがたるなど

☆受賞報告 平成14年1月26日(土)「阿倍野区社会福祉協議会設立50周年記念大会」にて、地域福祉に貢献したとして「感謝状」贈呈される。



サロン隣組ニュース

■「サロン淀川」5月の出会い

日時:5月19日(日)午後1時30分~4時
 場所:淀川区民センター「やすらぎ」
 大阪市淀川区三国本町2-14-3
 内容:色彩のパワーでストレス退治!
 ~こころとからだに優しくなる色の秘密~
 パネラー:伊藤真理氏
 (クレヨン ドゥ クルー カラーリスト)
 会費:なし
 問い合わせ先:淀川区社協(ボランティア・ビューロー)
 ☎06-6394-2900
 E-mail:soraji@riseonet.ne.jp

■「サロン・ひらの」5月の出会い

日時:5月25日(土)午後1時30分~4時
 場所:にこにこセンター(大阪市平野区平野東2-1-30)
 内容:未定
 参加費:1人100円
 問い合わせ先:平野区ボランティア・ビューロー
 大西 ☎06-6795-2200

■「サロン・にし」5月の出会い


日時:5月11日(土)午後1時30分~4時
 場所:西区ボランティア・ビューロー室
 大阪市西区新町4-5-14 6階(西区役所隣)
 地下鉄=西長堀駅4-A号出口からすぐ
 市バス=地下鉄西長堀駅から徒歩
 内容:あなたも易者ひかれる!
 ~姓名判断あれこれ~
 どなたでも、お気軽に参列してください
 ゲスト:ローターアクトクラブの方々
 会費:なし
 問い合わせ先:宮脇 ☎06-4394-5353

■「ウイズ東淀川」5月の出会い

日時:5月12日(日)午後1時30分~4時
 場所:東淀川在宅サービスセンター(ほほえみ会館の隣)
 大阪市東淀川区首原4-4-37
 ☎06-6370-1630
 内容:人生を大きく変えた瞬間
 ~僕が障害を受容するきっかけとなった出来事~
 ~現在とこれから~
 講師:赤尾広明氏(1969年生まれ、16歳のとき体育の授業
 中、事故で首を骨折)
 会費:なし
 問い合わせ先:鈴木昭二 ☎06-6340-3082
 FAX 06-6340-3012

■「サロンいんたみ」5月はお休みです。

サロンの絵はがき
五枚一組 一八〇円



電話は早い、
ファックスも
Eメールもある
けど、
こころ伝わる
サロンの絵はがきが
いい。

<サロン・あべの>の活動資金調達にご協力ください。

朗読テープのご案内

朗読グループ「糸でんわ」のご協力で〈サロン・あべの〉紙第189号の録音テープが出来ました。

■朗読テープ文庫

- (a) 〈サロン・あべの〉紙は、第1号より第189号までそろっています。
- (b) 〈サロン・あべの〉十周年記念誌「はあとが、はろー！」
- (c) 絵本「未知の記憶」(作・絵 中川勝彦)
- (d) 「ラジオたんぱ」放送「〈サロン・あべの〉平成7年5月の出会い」放送分(30分)
- (e) エッセー集「逃げた『ヨナ』～ボランティア活動の周辺～」(岡本栄一著＝糸でんわ音訳)
- (f) 「キミたちだけじゃ困るんだ～身障者だけで旅した十余年～」(山田誠1995・2・22著＝糸でんわ音訳)
- (g) 「金子みすずへの旅」(島田陽子著＝糸でんわ音訳)
- (h) 「タやけ空のオニヤンマ」(牧口一三著＝糸でんわ音訳)
- (i) 「ガベちゃん先生の自立宣言」(曾我部教子著＝糸でんわ音訳)
- (j) 「セルフヘルプグループ」(岡知史著＝糸でんわ音訳)
- (k) 「名物 天王寺かぶら」(猿田博創作 難波利三監修＝大阪市立天王寺図書館制作)
- (l) 「知らされない愛について」(岡知史著＝ほけっと音訳)
- (m) 「愛 ひとり旅」(奥田真祐美著＝糸でんわ音訳)
- (n) 「奥田真祐美のシャンソン手帳」(奥田真祐美著＝糸でんわ音訳)
- (o) 「もうちょっと知っとく？ 私たちの阿倍野」(難波りんご著＝糸でんわ音訳)
- (p) 「猫とシャンソン」(奥田真祐美著＝糸でんわ音訳)
- (q) 「ほんの少しの神に近い部分」(岡知史著＝糸でんわ音訳)
- (r) 「勁くしずかに」(河野勝行編・著＝糸でんわ音訳)

ご希望の方には、ダビング、または貸し出しをしますので、富田(☎06・6691・1028)まで。

お知らせ

〈サロン・あべの〉5月の出会い

日時…5月18日(土) 午後1時～4時
 場所…育徳コミュニティーセンター2階
 研修室(スロープ・車いすトイレ有)
 大阪市阿倍野区阪南町5-15-28
 TEL 06-6621-1901
 最寄り駅＝

- ・地下鉄御堂筋線「西田辺」
- ・赤バス「育徳会館」

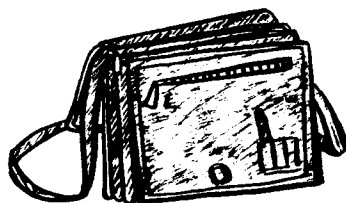
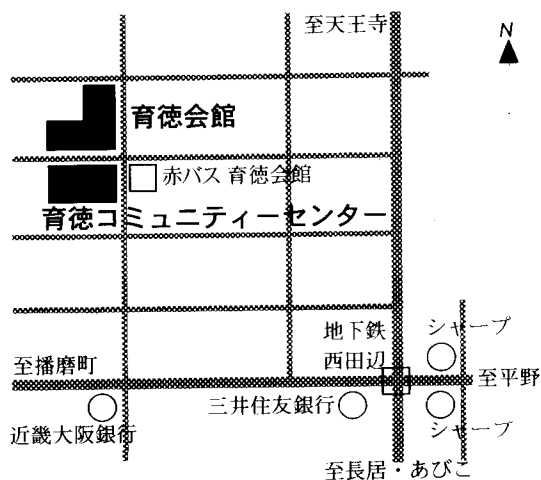
内容…障害者の雇用と就労を考える
 パネラー…茅原聖治氏

(龍谷大学経済学部非常勤講師・他)

会費…なし

問い合わせ先…

TEL 06-6691-1028 (富田慶子)



サロン紙を読んで収穫

東 百合子

一八九号を拝受しました。
ありがとうございます。

「メイクと心」を読んでメイクの効力は自分が毎日鏡と向き合う姿に表れています。自分も元氣、人にも元氣を与えるのですね。色についてもアナリストにテストしてもらったことがあります、よく自分に合う色がわかりました。いくつになっても美しくありたい私です。

五月二六日の「魅惑のシャンソン」——真祐美・いづみ姉妹によるシャンソンの名曲と、グリム童話——今から楽しみにしています。

稲垣恵雄さんの「目と耳と口」、なるほどと納得です。

「植物あれこれ」で桜開花のお話も知りました。何でも新しいことを知ることは、この年になっても収穫です。

感謝

カンパ・はがき・お茶菓子・カセットテープのご寄贈、またサロングッズのお買い上げを、ありがとうございます。

上平幸雄、岡賀寿子、桑田加代子、
瀬尾洋美、竹村定子、田辺サカエ、
田村昌子、松本妙子、道川内博子、
山村貴司、その他

◆サロン紙の合本が出来ました！

「サロン・あべの」紙一六六号から一八九号まで、二年分を一冊にまとめた合本が出来ました。平成十二年三月から平成十四年二月までの月々の出会いを振り返っていただくのもよし、連載をもう一度読み返してみるのにもよろしいのでは。サロン文庫においてあります。ご利用ください。

「再会のひとときをありがとうございました。40年もの年月が経っているのに、稲垣さんご夫婦はちっとも変わらぬ明るいそしてやさしいきれいなお心のまま、本当にうれしかったです。楽しい青春の1ページが止まったかのように、昔が蘇ってきました。・・・サロンの企画に感謝です。これからもよろしく」と、Oさんからハガキが届きました。(石)

From EDITOR 編集後記

<サロン・あべの>Vol.190

発行：平成14年4月20日 編集人：<サロン・あべの>運営委員会 定価¥100

連絡先：富田慶子 〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 TEL・FAX 06-6691-1028

表題：井上憲一・筆 文中イラスト：石田美禰子

郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941

印刷：セルフ社〒546-0044大阪市東住吉区北田辺町4-23-2ミスターDビル2階TEL06-6719-8212